

マルクスにおける「資本主義」認識

——「資本主義」語のはじまり(5)——

重 田 澄 男

- I. 二つの問題点
- II. 「資本主義」と「資本家的生産様式」
 1. 抽象名詞としての「資本主義」
 2. 「資本家的生産様式」の用語法
- III. 逆行的追跡
- IV. 資本主義認識における諸問題
 1. 「市民社会」は資本主義範疇であるか？
 2. 資本主義範疇はいかにして認識されたのか？
 3. 「市民的」か「ブルジョア的」か？
 4. なぜ「市民的生産様式」から「資本家的生産様式」に転換したのか？
- V. 資本主義発見のプライオリティ

I. 二つの問題点

すでにみてきたように、マルクスには「資本主義 Kapitalismus」という用語は存在しておらず、『資本論』についてみるならば、マルクスの資本主義範疇は「資本家的生産様式 kapitalistische Produktionsweise」という用語によってしめされているところである。

しかし、そこから、マルクスの資本主義範疇は「資本家的生産様式」という用語によってのみしめされているものであって、それは「資本主義」という用語で表現されている概念と同じものであるとみなしてしまうならば、重

大な問題点をかかえこむことになるであろう。

【第1の問題点】

「資本家的生産様式」という用語を、抽象名詞としての「資本主義」という用語と同じものとみなしてしまうならば、「資本家的生産様式」という用語でもってしめされているマルクスの資本主義範疇における規定的要因の限定性と、「資本主義」という抽象名詞で表現される概念に比しての相違が、看過されてしまうことになるであろう。

というのは、「資本主義」という抽象名詞は、「資本」にかかわるなんらかの特徴や状態をしめすものであるが、しかし、それがいかなる要因についてのものであるかについての限定性は存在していない。

それにたいして、「資本家的生産様式」なる用語は、「生産様式」についての特有の特徴をしめすものである。すなわち、マルクスの資本主義範疇としての「資本家的生産様式」は、「生産様式」なる要因についての特定の形態をしめすものである。

だからして、「資本家的生産様式」という用語をそのまま「資本主義」という用語と同じものとみなすということは、「資本家的生産様式」という用語によってしめされているマルクスの資本主義範疇における特有の規定的要因とその意義がみえなくなってしまうことになる。

【第2の問題点】

さらに、「資本家的生産様式」という用語がマルクスの資本主義範疇を表現する唯一の用語であるとみなしてしまうならば、マルクスには「資本家的生産様式」以外の用語でもって表現された資本主義範疇があったということを見逃してしまうことになる。

もしマルクスの資本主義範疇をしめす用語が「資本家的生産様式」のみであるとするとすれば、マルクスには『1861-63年の資本論準備草稿』への取り組みを始めた1860年以後にしか資本主義範疇は存在しなかった、ということにならざるをえない。

その場合には、1859年刊行の『経済学批判』や、あるいは1857-58年草稿としての『経済学批判要綱』、さらには1840年代や50年代における『共産党宣言』や『賃労働と資本』においては資本主義範疇はなかった、ということになる。

だが、そうではなくて、マルクスの資本主義範疇は1860年以前には「資本家的生産様式」とは異なる用語でもって表現されていたとするならば、それはいかなる用語であったのかを明らかにすることが必要になる。

このことは、『資本論』段階において「資本家的生産様式」という用語によってしめされている資本主義範疇は、マルクスによっていつ発見されていたかという用語でもって表現され、その後、それはいかにして「資本家的生産様式」なる用語に取りかえられることになったのか、ということをしめす必要があるということに他ならない。

ところで、そのことはさらに、マルクスが資本主義範疇について1860年より以前には別の用語でもって表現していたものを、どうして「資本家的生産様式」という用語に変更しなければならなくなったのか、その理由と新たな表現のとする積極的意味はいかなるものであるのかということをはっきりさせる必要があるということに繋がっていく。

ところで、このようなさまざまな問題点について、資本主義の用語法と概念内容について詳細な研究をおこなったパツソウも、さらには、マルクスには「資本主義」という用語がなかったということを指摘されたわが国の諸論者も、まったく問題にされていない。それはそのような問題があるということにまったく気づかなかったということかも知れない。

だが、これらの諸問題は、内容的には、マルクスにおける資本主義範疇がいかに認識されたかという資本主義認識の方法と、資本主義範疇の基本的内容をどのように理解するかという、きわめて重要な問題と密接に関連した論点に他ならないものである。

II. 「資本主義」と「資本家的生産様式」

1. 抽象名詞としての「資本主義」

現在、われわれは、「資本主義」という用語を、近代社会の経済システムあるいは社会体制をしめす概念として使っている。

しかしながら、「資本主義」という言葉は、言葉そのものの意味内容としては、それ自体が経済システムやあるいは社会体制を意味するものとしての規定性を不可分のものとしてもっているものではない。

そもそも、言葉としての形式的なあり方からするならば、「資本主義 capitalism」という言葉は、「資本 capital」という言葉に、抽象名詞語尾としての「主義 -ism」をつけてつくられた言葉である。

「資本 capital」という言葉は、「主要な」という意味の形容詞や「首都」や「大文字」といった意味の名詞としても使われるが、さらにまた、「基金」や「元手」や「個人や会社の資金」としての意味内容をもつものであって、この資金といった意味内容での「資本 capital」という言葉は、*Oxford English Dictionary (OED)* によると、すでに 1611 年にはその用法がみられたとのことである。

ところで、抽象名詞語尾としての「-ism」は、これまた *OED* の指摘によると、(1) (a) criticism (批評) や mechanism (機械装置, 機構) や organism (有機体) などのように、通常、「-ise, -ize」をつけてつくられる動詞に対応する行為やその結果をあらわす名詞をつくったり、(b) これと類似したかたちで heroism (英雄的行為) や patriotism (愛国心) や despotism (独裁) といった人の行動や行為を表現する言葉をつくる。さらに、(2) (a) Buddhism (仏教), Chartism (人民憲章運動), conservatism (保守主義), liberalism (自由主義),

Protestantism（新教）やあるいは Owenism（オーエン主義）などのように理論や宗教的、哲学的、政治的、社会的等のシステムの名称をつくったり、あるいは、(b) egoism（利己心、利己主義）、feminism（フェミニズム）、imperialism（帝国主義）、opportunism（日和見主義）、realism（現実主義、実在論）、romanticism（ロマン主義）等といった原理や原則の種類名をしめす言葉をつくる。また、(3) Americanism（アメリカ気質、アメリカ流儀）や Hellenism（ギリシャ文化）や Orientalism（東洋風）といった特有性や特徴をしめす用語を形成したりするものである¹⁾。

このようなものとして、「資本 capital」に接尾語「主義 -ism」を接合してつくられる「資本主義 capitalism」という言葉は、さしあたりは、「資本」そのものやあるいはその人格的担い手としての「資本家」の特徴や活動の状態やあるいは資本のもつ原理的性質等を表現する抽象名詞として使われるというかたちが、もっとも通常の言語使用法である。

このことは、1850年前後における「資本主義」という言葉の使いはじめの時期の用語法、すなわち、ピエール・ルルーにおける「資本」と同義の用法、資本家的な「ブルジョアの気分」を表現するものとしてのサッカーの用語法、あるいは、特有の定義づけを与えながらの「資本」の「排他的占有」という事態についてのルイ・ブランの用語法、さらには、内容的には「資本」あるいは「資本家」と同義で使っているブランキの用法等は、「資本主義」という言葉の用語法としてはきわめて自然であって、当時の日常生活において、そのような意味内容の「資本主義」という用語はそのまま通用するであろう妥当性をもった用語法である、と思われるところである。

そのように、「資本主義」という用語は、そのかぎりにおいては、経済システムや社会体制の特有の形態をしめすものとしてよりも、むしろたんなる「資本」や「資本家」の存在や行動や機能にかかわるものである。

2. 「資本家的生産様式」の用語法

それにたいして、マルクスの「資本家的生産様式 kapitalistische Produktionsweise」という用語は、その用語形成の当初から、社会的経済制度やその歴史的形態にかかわるものとしての規定的性格をもつ「生産様式 Produktionsweise」という要因についてのあり様をしめすものである。そして、その特定の形態にたいして「資本家的 kapitalistisch」という限定詞がつけられて、近代社会特有の内容を表現する用語としてつくられたものに他ならぬものである。

そもそも「生産様式」とはいかなるものであるのか。

この「生産様式」という用語は、マルクスによってつくられた言葉である。それが、いつ、いかなるかたちでつくられたものであるかについては、後で取りあげることにする。

ここでは、とりあえず、『資本論』のなかの指摘によりながら、きわめて概括的なかたちで「資本家的生産様式」についてその内容をしめす。

マルクスは、「生産様式」について、『資本論』のなかでは、直接生産過程における〈生産の仕方〉という狭い意味で用いていることもあるが、「資本家的生産様式」という用語として使う場合には、近代社会特有の歴史的な経済関係の特徴的形態をしめすという、より広い概括的把握における用語として使っている。

そのようなものとしての「資本家的生産様式」は、古代の「奴隷制にもとづく生産様式」や中世の「封建的な生産様式」や、あるいは社会主義的な「結合生産様式」といったさまざまな歴史的時代の諸形態と対比されるところの、近代社会特有の歴史的なものとしての形態規定性をもつものであって、その規定的性格と内容を「資本家的」という限定詞によって表現されるところの「生産様式」の形態に他ならぬものである。

そして、この近代社会特有の歴史的形態としての「資本家的生産様式」は、内容的には、「賃労働の形態での労働と、資本の形態での生産諸手段とが前提」されているところの「本質的に剰余価値の生産であり剰余価値の吸収である資本家的生産」を基礎としたものであるが、それは「ただ物質的生産物を生産するだけではなくて、物質的生産物がその中で生産されるところの生産関係をたえず再生産し、したがってまたこれに対応する分配関係をもたえず再生産する」ような経済構造をしめす範疇である。

マルクスは、『資本論』第1巻の「序言」において、『資本論』は「近代社会の経済的運動法則」を明らかにすることを目的として、「資本家的生産様式と、これに照応する生産諸関係および交易諸関係」を研究したものであると指摘しており、この「資本家的生産様式」を基軸的な範疇として近代社会の経済的運動法則の解明をおこなっているのである。

こうして、「資本家的生産様式」という概念と用語は、近代社会の経済分析にとっての基軸的で規定的要因をなす範疇として『資本論』の全体のなかでくりかえし使われているものであって、ピエール・ルルーヤルやルイ・ブランやブランキなどにおける「資本主義」という用語のように、たまたま1回か2回ほど使っただけといったものではない。

III. 逆行的追跡

では、そのような『資本論』において近代社会の経済的諸関係にとっての基軸的な範疇とされている「資本家的生産様式」という用語がしめす資本主義範疇は、マルクスの著作においては、『資本論』以前のどの時点にまでさかのぼって見いだされるものであるのか。

その点検のために、時間的経過に逆行するという“逆行的追跡”のかたちをとりながらみていくことにしたい。

「資本家的生産様式」

『資本論』第1巻が発行されたのは1867年であるが、それより以前に「資本家的生産様式」という用語が使われているのは、1860年前後の時期までである。

1860年代においては、マルクスは、『1861-63年の経済学草稿』と呼ばれている23冊のノートと、『資本論』全3巻についての最初の異文草稿としての膨大な『1863-65年の経済学草稿』と、そして、『資本論』第1巻の原稿の作成と清書をおこなっている。

ところで、この時期には、マルクスの「資本家的生産様式」という用語は完全に定着したものとなっている。

すでに、『1861-63年の経済学草稿』の執筆のはじめから、「資本家的生産様式」という用語は、次のように明確に使用されている。

「A. スミスが分業を、資本家的生産様式 (kapitalistische Produktionsweise) に特有なものとして、すなわち、機械および単純協業と並ぶ、労働を形態的にだけでなくその現実性においても資本のもとへ包摂することによって変化させるもの、として把握しなかったことだけは明らかである。」²⁾

「市民的生産様式」

ところが、1859年に出版された『経済学批判』においては、「資本家的生産様式」という用語はまったく使われていない。さらにいえば、それ以前においても、マルクスは、「資本家的生産様式」という用語をまったく使用していないのである。

このことはなにを意味するのか。もし「資本家的生産様式」という用語が資本主義範疇をしめす唯一の言葉であるとするならば、マルクスには、その研究開始の時期から1859年の『経済学批判』の出版にいたるまでの時期においては、資本主義範疇はなかったということになる。

だが、『経済学批判』において、マルクスは、「資本家的生産様式」という用語の代わりに、同じ意味内容の規定的事物にたいして、「市民的（ブルジョア的）生産様式 *bürgerliche Produktionsweise*」という用語を使っているのが見いだされる。

『経済学批判』の「序言」において、マルクスは次のようにいっている。

「大づかみにいって、アジア的、古代的、封建的および近代市民的生産様式 (*modern bürgerliche Produktionsweise*) が経済的社會構成のあいつぐ諸時期として表示される。市民的生産諸関係は、社会的生産過程の最後の敵対的形態である。敵対的というのは、個人的敵対という意味ではなく、諸個人の社会的な生活諸条件から生じてくる敵対という意味である。」³⁾

この「近代市民的生産様式」なるものは、近代社会特有の「生産様式」の形態であり、アジア的形態、古代的形態、中世の封建的形態と相ならぶ「生産様式」の近代的な歴史的形態に他ならないものであり、階級的な敵対関係をもったものであるからして、それは『資本論』段階における資本＝賃労働の階級関係をもった「資本家的生産様式」と同じものとみなしていいものである。

すなわち、マルクスは、『資本論』段階においては「資本家的生産様式」という用語によってしめしていた「生産様式」の「資本家的 *kapitalistische*」形態という資本主義範疇をしめす用語を、『経済学批判』においては、「市民的 *bürgerlich*」という規定的限定詞をつけた「市民的生産様式」という用語でもってしめしているのである。

この『経済学批判』本文においては、資本主義範疇にかかわる用語としてはさらに「生産関係」あるいは「生産」についての言葉が出てくるが、そこでつけられている限定詞も、けっして「資本家的」ではなくて、「市民的」であって、「市民的生産諸関係」や「市民的生産」という用語が使われている。

ところで、マルクスは、『経済学批判』を執筆する直前の1857年から58年にかけて、のちに『経済学批判要綱』と名づけられた初めての体系的な経済理論にかんする『1857-58年の経済学草稿』を『7冊のノート』に書きあげている。

この『経済学批判要綱』においても、「資本家的生産様式」という用語はまったく使われていない。

しかし、この『要綱』においては、「交換価値のうえにうちたてられた生産様式 die auf den Tauschwerth gegründete Produktionsweise」とか「資本にもとづく生産様式 die auf das Capital gegründete Produktionsweise」といったかたちの用語が多種多様に使われている。そして、そのなかで、生産について、「資本家的生産 kapitalistische Produktion」という用語を1回だけ使っている。

ところで、それよりも前の時期についてみると、マルクスは、1849年の4月から『新ライン新聞』に連載した『賃労働と資本』や、1848年に出版された『共産党宣言』においては、「市民的生産関係 bürgerliche Produktionsverhältnis」という用語を使って資本主義範疇をしめしている。『賃労働と資本』には、次のような叙述がみられる。

「諸個人がそのなかで生産をする社会的関係、すなわち社会的生産関係は、物質的生産手段、生産力が変化し発展するにつれて、変化し変動する。全体としての生産関係は、社会的関係、社会と呼ばれるものを、しかも一定の歴史的発展段階にある社会、独特で特色のある性格をもった社会を、形づくる。古代社会、封建社会、市民社会は、そういう社会関係の全体であり、同時にそれぞれ、人類史上の特別の発展段階をあらわしている。／資本もまた、ひとつの社会的生産関係である。それはひとつの市民的生産関係 (bürgerliche Produktionsverhältnis) であり、市民社会の一生産関係である。」⁴⁾

マルクスが「市民的生産様式」や「市民的生産関係」という用語を使っているもっとも古い論文・著書は、1847年10月28日から11月25日にかけて『ブリュッセル・ドイツ語新聞』に掲載した「道徳的批判と批判的道徳」であって、そこでは「市民的生産様式 *bürgerliche Produktionsweise*」という用語が使われている。

そして、この「道徳的批判と批判的道徳」が書かれた1847年10月より以前には、ドイツ語での「市民的生産様式」「市民的生産関係」といった用語はまったく使われていない。

その意味では、この「道徳的批判と批判的道徳」は、マルクスがドイツ語で資本主義範疇の存在をしめしている最初の文献である、ということができる。

「ブルジョアの生産諸関係」

しかしながら、マルクスが資本主義範疇についてしめしている文献は、それ以前にも存在する。

というのは、「道徳的批判と批判的道徳」が書かれた1847年10月よりも前に、フランス語によってであるが、資本主義範疇を表現する用語が使われているのを、見いだすことができるからである。

すなわち、1847年7月に、マルクスは、プルードンの『経済的諸矛盾の体系、または貧困の哲学』（1846年）を批判した『哲学の貧困』を出版しており、この本はフランス語で書かれているが、そこで、「ブルジョアの生産形態 *les formes de la production bourgeoise*」とか「ブルジョアの生産諸関係 *les rapports de la production bourgeoise*」といった用語によって表現されている資本主義範疇を見いだすことができる。

「リカードはブルジョアの生産 (*la production bourgeoise*) をば地代を決定するうえで必要なものとして、前提しておきながら、しかもなお、それ

を、あらゆる時代、あらゆる国々の土地所有に、適用する。これは、ブルジョア的生産諸関係 (les rapports de la production bourgeoise) を永久的な諸カテゴリーとして表現するすべての経済学者の常套手段である。』⁵⁾

ところで、マルクスは、『哲学の貧困』の出版の直前に、プルードンについて論評を加えた「アンネンコフ宛ての手紙」(1846年12月28日付け、フランス語)を書いているが、そこでも同様な資本主義用語が使われている。

このような「アンネンコフ宛ての手紙」や『哲学の貧困』において使われている「生産のブルジョア的形態 la forme bourgeoise de la production」や「ブルジョア的生産諸関係 les rapports de la production bourgeoise」といった用語は、近代社会特有の「生産」や「生産関係」の歴史的形態をしめすものであって、『資本論』段階における「資本家的生産様式」と共通している資本主義範疇に他ならぬものであることは明らかである。

近代社会特有の生産の歴史的形態をしめすものとしての資本主義範疇をしめす用語が見いだされるのは、ここまでである。

それよりも古い時期にマルクスが書いている論文・著書さらには手紙において、資本主義範疇を表現する用語はまったく使われていない。

このことは、用語法的にみて、マルクスの資本主義範疇は、1846年12月28日付けの「アンネンコフ宛ての手紙」において初めて確定的に提示され、1847年に刊行した『哲学の貧困』において、公表された刊行物におけるものとしては初めて明らかにしめされた、ということの意味する。

唯物史観の確立と「生産様式」

ところで、すでにみたように、マルクスの資本主義範疇を表現する「資本家的生産様式」といった用語は、規定される要因たる社会的経済構造についての「生産様式」や「生産関係」等と、そして、近代社会特有の歴史的形態規定性をしめすものとしての「資本家的」といった形容詞的限定詞との結合

によって、はじめて成立する概念であり用語である。

このような資本主義範疇としての「資本家的生産様式」といった用語を打ちたてるためには、「資本家的」等の規定的限定詞を確定する前に、規定される要因としての「生産様式」や「生産関係」について確定しておくことが必要である。

そのように、規定されるべき要因としての「生産様式」や「生産関係」を概念的に確定する仕事を、マルクスは、いつ、いかにしておこなったのか。

そのようなマルクスの資本主義範疇において「資本家的」といった限定詞によって規定される要因たる「生産様式」「生産関係」等を確定するという理論的作業は、人間社会の社会的構造とその歴史的形態ならびにその変遷についての社会観＝歴史観としての唯物史観の確立によっておこなわれたものである。

そして、その唯物史観をマルクスが打ちだしたのは、「アンネンコフ宛ての手紙」執筆の直前の1845年11月から1846年8月にかけてエンゲルスと共同で執筆した『ドイツ・イデオロギー』においてである。

『ドイツ・イデオロギー』において提示されている唯物史観の内容は、のちに『経済学批判』の「序言」においてマルクス自身によって次のように簡潔なかたちで概括されている。

「人間は、彼らの生活の社会的生産において、一定の、必然的な、彼らの意志から独立した諸関係に、すなわち、彼らの物質的生産諸力の一定の発展段階に対応する生産諸関係にはいる。これらの生産諸関係の総体は、社会の経済的構造を形成する。これが実在的土台であり、その上にひとつの法律のおよび政治的上部構造がそびえ立ち、そしてそれに一定の社会的意識形態が対応する。物質的生活の生産様式が、社会的、政治的および精神的生活過程一般を制約する。人間の意識が彼らの存在を規定するのではなく、彼らの社会的存在が彼らの意識を規定するのである。……大づかみに

いて、アジア的、古代的、封建的および近代市民的生産様式が経済的社会構成のあいつぐ諸時期として表示されうる。』⁶⁾

このような人間社会の社会構造とその歴史的形態ならびにその変遷についての歴史理論としての唯物史観を打ちたてるなかで、マルクスとエンゲルスとは、そのような唯物史観を構成する諸要因として、「土台」「上部構造」「生産諸力」「生産様式」「交通関係、交通様式、交通形態」「生産諸関係」といった諸要因についての概念とそれをあらわす用語を、確定している。

そして、さしあたりは仮説的性格を多分にもつところの社会観・歴史観としての唯物史観を“導きの糸”としながら、人間社会の歴史的形態にとって規定的な要因とされている「生産様式」についての近代社会特有の歴史的形態を明らかにし、それにたいして「ブルジョア的」「市民的」「資本家的」といった限定詞をつけて、「ブルジョア的生産関係」「市民的生産様式」「資本家的生産様式」といった用語を使いながら資本主義範疇を表現して、それを解明していったのである。

初期マルクスにおける「市民社会」概念

だからして、1845年11月から1846年8月にかけて執筆した『ドイツ・イデオロギー』以前の近代社会についての取組みにおいては、マルクスは、のちに『資本論』における基軸的範疇としての「資本家的生産様式」という用語で表現される資本主義範疇を持ち合わせていなかったといわざるをえない。

すなわち、1843年に執筆された「ヘーゲル国法論批判」「ユダヤ人問題によせて」「ヘーゲル法哲学批判・序説」や、『経済学・哲学草稿』（1843-44年執筆）においても、さらには『聖家族』（1845年2月刊行）においても、そこでは彼独自の社会観・歴史観としての唯物史観をまだ確定しておらず、したがって、唯物史観における特有の要因としての「生産様式」「生産関係」といった概念も持ち合わせていないのであって、それゆえ、そこにおける近代

社会についての批判的分析と説明は、「生産様式」の近代的形態をしめすものとしての資本主義範疇をもつことなしにおこなわれていたのである。

IV. 資本主義認識における諸問題

それでは、ここで、これまで述べたことと重複することにもなるが、マルクスにおける資本主義範疇の認識にかかわるいくつかの諸問題について、これまでたどってきた“逆行的追跡”とは逆に、今度は理論形成史あるいは発展史の順序に沿いながら、みていくことにしたい。

1. 「市民社会」は資本主義範疇であるか？

マルクスの近代社会への取組みは、ヘーゲルの「市民社会」概念への取組みから始まる。

1843年3月『ライン新聞』の編集者の地位から身を引いた24歳の青年マルクスは、研究生活にはいり、ヘーゲル『法の哲学』にたいする批判的検討にとりかかり、初期3論文を書きあげる。

この初期マルクスの近代社会把握にとっての最初のキー・カテゴリーとなったものは「市民社会 *bürgerliche Gesellschaft*」である。

ところで、この時期におけるマルクスの近代社会把握にとってのキー・カテゴリーたる「市民社会」は、『資本論』段階における「資本家的生産様式」と同義の資本主義範疇であるのかどうか、という問題がある。

馬場宏二氏は、拙著『資本主義の発見』（1983年、御茶の水書房）に言及しながら、次のようにいわれている。「マルクスは、「資本主義」をほとんど使わなかったようである。この点を詳しく考証した重田氏によると、初期には「ブルジョア社会」といい、のちに『資本論』では「資本家的生産様式」と呼

ぶようになった⁷⁾と。この指摘においては、初期マルクスにおける *bürgerliche Gesellschaft* (市民社会, ブルジョア社会) 概念も資本主義範疇に含まれるものとされているようである。

また、伊藤誠氏も、次のようにいわれている。「重田澄男 (1983 年) によると、そのようなマルクスの作業が理論体系として結実してゆくなかで、1859-61 年ごろにマルクス自身、それ以前に用いていた市民社会や市民的 (ないしブルジョア的) 生産様式といった用語にかえて、資本主義的生産ないしは資本主義的生産様式の支配する社会といった用語を用いるようになり、それとほぼ同義で資本主義という用語も『剰余価値学説史』と『資本論』にそれぞれ 1 回ずつみられるようになった⁸⁾と。

拙著を取りあげていただけるのは感謝にたえないところであるが、マルクスにおける資本主義の「発見」にかんしていささか誤解があるようである。

拙著では、マルクスにおいて資本主義範疇が確定しているのは、初期マルクスの「市民社会」からではなく、唯物史観の確定後の「アンネンコフ宛ての手紙」あるいは『哲学の貧困』における「ブルジョア的生産関係」以降においてである、としているところである。

もともと「市民社会 *bürgerliche Gesellschaft*」という言葉は、変容と多義化の過程をたどってきた言葉である。「市民社会」については、トマス・ホッブズやロックのようにそれを「政治社会」と同義のものとする見解もあるが、ファーガスンやアダム・スミスのように万人が商人となるような自由・平等・独立の諸個人が取り結ぶ文明化された商業的社会とみなす理解や、あるいは、ヘーゲルのように、「私的 = 特殊な諸利益にもとづく欲望の体系」としてとらえ、それは〈家族—市民社会—国家〉といったかたちで家族と国家との中間に位置する分裂態として、国家によって止揚されるべきものとみなす理解もある。

ところで、初期マルクスの「市民社会」把握は、ヘーゲルの理解を受けとめながら検討をおこなっているものであるが、しかし、ヘーゲル的内容にそ

のままとどまるものではない。ヘーゲルにたいする批判的なとらえ返しとその内実の充実をおしすすめているものである。

マルクスは、初期3論文のなかの「ヘーゲル国法論批判」において、近代社会の特徴を、ヘーゲルにもとづいて政治的国家と市民社会との分離に見いだしながらも、人びとの非政治的な世俗的な私的な活動領域における「市民社会」こそが規定的な基礎をなすものととらえて、土台・上部構造論的な社会構造把握の基礎的観点を確定する。

そして、「ユダヤ人問題によせて」においては、私的所有批判のうえに、「欲望と労働と私利と私権の世界」としての市民社会を、疎外された社会形態であって現実的に変革され止揚されるべき社会と把握し、さらに、「ヘーゲル法哲学批判・序説」において、市民社会のなかの一階級としてのプロレタリアートによる革命という社会主義的観点を確定するにいたっているのである。

マルクスは、そのように、世俗的世界としての「市民社会」を国家の基礎をなす土台としてとらえ返し、市民社会における矛盾は、ヘーゲルのように思弁による国家への止揚ではなくて、市民社会そのものの現実的変革によって止揚されるべきものと把握するのである。

しかも、マルクスはその後、『経済学ノート』として知られている『パリ抜粋ノート』にみられるように経済学の研究をおこないながら『経済学・哲学草稿』を執筆しており、アダム・スミスの『国富論』にもとづく「資本の利得」「労賃」「地代」といった所得源泉をもった資本家・賃労働者・土地所有者よりなる近代社会における三大階級についての対比的分析をおこない、「疎外された労働」についての論稿を書いている。

このように、この時期のマルクスは、近代「市民社会」の内実を、私的所有のうえに構成される資本家・賃労働者・土地所有者の三大階級からなる社会であり、プロレタリアートによる私的所有の止揚によって変化さるべき社会形態として把握するようになるころまで、近代社会にたいする現実的把

握の内容は深まっている。

しかしながら、そこにおいてはまだ、社会構造において規定的基礎をなす要因を生産活動においてとらえる観点は不分明であって、規定的要因としての生産活動における「生産形態」「生産様式」「生産関係」のもつ意義は未確定であり、しかも、近代社会の経済的諸関係の特徴は、疎外された労働に根拠づけられた私的所有を基軸とする把握となっていて、疎外論的観点からの批判的把握にとどまっており、規定的要因としての「生産様式」における近代社会特有の歴史的形態規定性について、その概念的把握はまだ明確におこなわれてはいない。

そのように、そこにおいてはまだ、総体としての社会的諸関係の構造的把握における歴史的形態規定性を明確にとらえる社会観＝歴史観が確立しておらず、近代社会特有の形態を把握するにあたっての総体的な規定的把握がおこなわれていないため、のちに『資本論』における「資本家的生産様式」へと繋がっていくことになる資本主義範疇はまだ存在していない、といわざるをえない。

もちろん、1845-46年の唯物史観の確立以降における資本主義範疇としての「資本家的生産様式」の確定の後においては、そのような「生産様式」の近代社会的形態を基礎にしたものとされた「市民社会」は資本家的社会としての規定的内容をもつものとして、「ブルジョア社会」と表現しうる規定的性格をもたされることになるが、そこにおける資本主義範疇としての規定的要因はあくまでも「資本家的生産様式」であって、「市民社会」ではないのである。

2. 資本主義範疇はいかにして認識されたのか？

ここでの問題点は、『資本論』において「資本家的生産様式」という用語によって表現されているマルクスの資本主義範疇は、理論形成史のいつの時

点において、いかにして認識されたものであるのか、ということである。

マルクスにおける資本主義範疇の認識は、端的にいて、唯物史観において人間社会の社会的諸関係を規定する基礎的要因とされている「生産様式」についての、近代社会特有の歴史的形態をとらえるというかたちで、おこなわれたものである。

すなわち、初期マルクスにおける現実的事態についての把握の深化のなかで、マルクスは、人間社会の社会的諸関係における規定的な基礎をなすものはけっして「国家」ではなくて世俗的な現実生活たる「市民社会」と「家族」であるという土台・上部構造論的社会構造把握の確立のうえに、さらに、「市民社会」としてとらえられていた社会の現実的な活動領域たる経済的諸関係における規定的要因は何であるのか、そして、その規定的要因における近代社会特有の形態としての〈種差〉は、いかなるものとして把握さるべきものであるのかといった、社会構造とその歴史的形態把握のための社会観＝歴史観としての〈唯物史観〉構想、その確立への道を切りひらいていく。

そして、マルクスとエンゲルスとは、1845-46年に共同執筆した『ドイツ・イデオロギー』の第1巻第1章「フォイエルバッハ」において、人間社会の社会構造とその歴史的諸形態は物質的生産諸力の発展に照応した生産様式の歴史的形態とその移りかわりによって規定されるものであるという唯物史観を提示し、次のように述べている。

「一定の生産様式ないし生産段階は、つねに一定の協働の様式ないし社会の段階と結びついているということ、そして人々が手にしうる生産諸力の大きさが社会的現状態を制約するのであり、従って“人類の歴史”はつねに産業の歴史との聯関で研究され論述されねばならないということ、これである。」⁹⁾

マルクスたちは、このようなかたちで唯物史観の基本的観点と内容を確定

するとともに、唯物史観を構成する諸要因として、特有の規定的性格をもつところの「土台」「上部構造」「生産諸力」「生産様式」「交通諸関係、交通様式、交通形態」「生産諸関係」といった諸要因と用語もまた確定する。

そして、そこから、近代社会の規定的内容の把握にあたっては、それまでのような「市民社会」についての疎外論的観点からの批判的把握ではなくて、唯物史観の観点とそれを構成する諸要因をテコとした歴史的形態としての規定性を明確にもつものとしての把握へと向かうのである。

そのような唯物史観を“導きの糸”とした近代社会の経済的諸関係の規定的形態についてのマルクスの把握は、まず、プルードンの『経済的諸矛盾の体系、または貧困の哲学』にたいする批判をおこなった「アンネンコフ宛ての手紙」に見いだされる。

そこで、マルクスは、「人間がそのもとの生産し、消費し、交換する経済的諸形態は、一時的で歴史的なのです。あらたな生産諸力が獲得されるとともに、人間は彼らの生産様式 (mode de production) を変え、また、生産様式とともに、この特定の生産様式の必然的諸関係に他ならなかったすべての経済的諸関係を変える」¹⁰⁾のものであると、経済的諸形態における「生産様式 mode de production」の規定的性格について指摘しながら、次のようにいう。

「プルードン氏は、所有を独立の一関係として立てることによって、単に方法上の一誤謬をおかしているだけではありません。——すべてのブルジョア的生産形態 (les formes de la production bourgeoise) を結びつけている紐帯を彼は把握していないこと、一定の時代における生産形態の歴史的な一時的な性格を理解していないこと、このことを彼は明らかにしめしていません。」¹¹⁾

そこにおける「ブルジョア的生産形態」「生産のブルジョア的形態」とい

う表現は、「歴史的な一時的な性格」をもつ「一定の時代における生産形態」としての規定性を明確にもつところの近代社会に特有の形態をしめすものとされているものである。

かくして、近代社会の経済的基礎としての「生産様式」における近代社会に特有の歴史的形態としての規定性をしめす範疇が、ここに、初めて、「ブルジョア的生産形態 *les formes de la production bourgeoise*」あるいは「生産のブルジョアの形態 *la forme bourgeoise de la production*」という用語によって表現されるにいたったのである。

マルクスによる「資本主義の発見」は、ここに、その第一歩をふみだしたといえることができる。

そのような資本主義範疇の確定と用語表現は、「アンネンコフ宛ての手紙」につづいて、ブルードン批判の著作として公刊された『哲学の貧困』において明示的にしめされている。

この『哲学の貧困』において、一般に公開される著作においては初めて、近代社会の社会的諸関係にとっての規定的要因をなすものとしての歴史的形態をしめす範疇として、「ブルジョア的生産諸関係 *les rapports de la production bourgeoise*」という表現が使われるようになっている。

「ブルジョア的生産諸関係」という範疇は、まさに、唯物史観における社会諸関係の経済的基礎をとらえる特有の要因としての「生産関係」についての、近代社会に特有のものとしての経済的諸関係における歴史的形態規定性をもった要因の把握が、「ブルジョア的」という表現によっておこなわれていることを、明確にしめしている。

このような、唯物史観にもとづくマルクスによる近代社会の経済諸関係の解明について、エンゲルスは、マルクスの『経済学批判』の紹介のなかで、「このドイツ経済学〔マルクスの経済学〕は、根本において唯物史観にもとづいており、この史観の要綱は前述著作〔『経済学批判』〕の序言のうちに簡単に述べられている」¹²⁾と指摘しており、また、マルクス自身も、『経済学批判』

の「序言」において、「われわれの見解〔唯物史観を導きの糸とした見解〕の決定的な諸点は、1847年に刊行されたブルードンに反対した私の著書『哲学の貧困』のなかで、たんに論争のかたちではあったが、初めて科学的に決められた」¹³⁾と指摘しているところである。

そのような「アンネンコフ宛ての手紙」および『哲学の貧困』で使われたフランス語で表現された資本主義範疇は、ドイツ語としては、『ブリュッセル・ドイツ語新聞』の1847年10月28日付けから11月25日付けまでに連載された「道徳的批判と批判的道徳」においてみられるところであり、そこでのドイツ語での用語表現としては、次のように「市民的生産様式 *bürgerliche Produktionsweise*」という言葉が使われている。

「プロレタリアートがブルジョアジーの政治的支配を打倒するとしても、歴史の経過のなかに、その『運動』のなかに、市民的生産様式 (*bürgerliche Produktionsweise*) の廃止を、したがってまたブルジョアの政治的支配の決定的打倒を必然にする物質的諸条件がまだ作りだされていないかぎりには、その勝利は一時的なものになるにすぎず、1794年と同じように、市民革命そのものに役立つ一契機となるにすぎないであろう。」¹⁴⁾

そして、そのようなかたちでの「市民的生産」「市民的生産諸関係」「市民的生産様式」という用語表現をとったドイツ語形での資本主義範疇は、このあと、『共産党宣言』『賃労働と資本』等々と10年以上にわたって、マルクスにおける近代社会の経済的諸関係の分析における基軸的範疇として使われつづけながら、さらなる研究によって近代社会の経済的諸関係についての理論的・実証的な把握の深化をすすめているのである。

3. 「市民的」か「ブルジョアの」か？

そのように、マルクスが打ちたてた資本主義範疇は、ドイツ語の著書・論文においては、さしあたりは、「bürgerlich 市民的（ブルジョアの）」という限定詞によって表現される用語となっている。

ここでの問題は、この〈bürgerlich〉という限定詞がつけられた「生産」や「生産様式」にとっての用語について、日本語への翻訳にあたって、「ブルジョアの」という訳語をつけて「ブルジョア的生産様式」とするか、それとも、「市民的」という訳語を使用して「市民的生産様式」といった用語とするか、という問題である。

それについては、邦訳の『マルクス＝エンゲルス全集』をはじめとして、「ブルジョアの」という訳語を使用して「ブルジョア的生産様式」といった訳語をあてているのが普通である。

だが、本書では、それにたいして「市民的」という訳語を使用して、「市民的生産様式」といった用語としている。そのように、あえて「市民的」という訳語をつけたのは、一定の理由があつてのことである。

たしかに、内容的にみると、「道徳的批判と批判的道徳」（1847年）より始まって『経済学批判』（1859年）までの間に使われているマルクスにおける〈bürgerlich〉な「生産様式」や「生産関係」という用語の実体は、けっして対等・自由・平等の自立的生産者たちによる生産ではなくて、資本＝賃労働の階級関係のもとでの生産のうゑに打ちたてられている生産様式である。

したがって、そのような実体的内容に即していえば、日本語としては「市民的生産様式」よりも「ブルジョア的生産様式」という訳語の方がより内容にふさわしい訳語であることは、確かである。

だが、そのことを十分に承知したうえで、ことさらに「市民的生産様式」という訳語を使ったのは、2つの理由による。

その理由の1つは、そもそもドイツ語形での「bürgerliche Produktionsweise」という用語がつけられたときのことにかかわるものである。

マルクスは、唯物史観の確立の後に、社会的諸関係にとっての基礎をなす経済的土台における規定的要因である「生産様式」や「生産関係」の近代社会における特有の歴史的形態をしめす用語として、まずは、「アンネンコフ宛ての手紙」と『哲学の貧困』において、フランス語で、「bourgeoise ブルジョア的な」という限定詞をつけて「les rapports de la production bourgeoise ブルジョア的生産諸関係」「la production bourgeoise ブルジョア的生産」という用語でもって表現している。

問題は、そのようなフランス語での用語表現をドイツ語での用語に置き換えるにあたって、いかなるドイツ語の言葉を使ったか、ということである。

ところで、『哲学の貧困』の後に書かれた「道徳的批判と批判的道徳」や『共産党宣言』などのドイツ語での論文・著書においては、いくつかの用語については、「Bourgeois-ブルジョア的」という接頭語をつけた用語がつけられて、「Bourgeoisklasse ブルジョア階級」「Bourgeoisstaats ブルジョア国家」「Bourgeoisregime ブルジョア制度」「Bourgeoisepoche ブルジョア時代」といった言葉が使われている。

だが、それにもかかわらず、マルクスは、「生産様式」「生産関係」「生産」等にかんするかぎりは、そのような「Bourgeois-ブルジョア的」という接頭語をかぶせた用語としての「Bourgeoisproduktion ブルジョア的生産」あるいは「Bourgeoisproduktionsweise ブルジョア的生産様式」「Bourgeoisproduktionsverhältnisse ブルジョア的生産諸関係」といった用語を使わないで、〈bürgerlich〉という限定詞をつけた用語たる「bürgerliche Produktion」あるいは「bürgerliche Produktionsweise」「bürgerliche Produktionsverhältnis」といった用語をわざわざ使っているのである。

初期マルクスにおいては、この〈bürgerlich〉という限定詞は、まさに「ヘーゲル国法論批判」など初期3論文にみられるように、ヘーゲルの『法

の哲学』においてキー概念の1つをなしていた「市民社会 *bürgerliche Gesellschaft*」の規定的限定詞として使われていたものであった。

ところで、このヘーゲルにおける〈*bürgerliche Gesellschaft*〉という用語は、けっして資本主義的な「ブルジョア社会」としての意味あいをもった規定性において使われているものではなくて、〈家族—市民社会—国家〉という展開にしめされているように、家族と国家との中間に存在する範疇たる世俗的な現実社会としての「市民社会」を示すものに他ならぬものである。

そのように、マルクスは、「生産様式」の近代社会特有の歴史的形態をしめす要因を、他の用語におけるようにドイツ語としても使える「ブルジョアの *Bourgeois*-」という接頭語を使わないで、あえてヘーゲルの「市民社会 *bürgerliche Gesellschaft*」においてつけられていた「*bürgerlich* 市民的」という限定詞を「生産様式」につけているのである。

このことが、マルクスの〈*bürgerliche Produktionsweise*〉を、「ブルジョアの生産様式」ではなくて、「市民的生産様式」として「市民的」という訳語をあてた理由の1つである。

その理由の第2点は、のちの中期マルクスから後期マルクスへの転換にあたっての、「市民的生産様式」という用語の意識的な全面的廃棄と「資本家的生産様式」という用語への転換にかかわるものである。

次の節で詳述するところであるが、マルクスは、近代社会の経済諸関係についての研究がすすむなかで、その一定の時期に〈*bürgerliche Produktionsweise*〉という用語の代わりに、かなり苦闘しながらの試行錯誤のすえに「*kapitalistische Produktionsweise* 資本家的生産様式」という用語への転換をはかり、結局は『資本論』にみられるように、ほぼ全面的に「資本家的生産様式」「資本家的生産」といった「*kapitalistisch* 資本家的」という規定的限定詞による表現に一元化して、〈*bürgerliche Produktionsweise*〉という用語は廃語として使わなくなっているのである。

なぜ、〈*bürgerlich*〉な「生産様式」という用語を廃棄して、〈*kapitalistisch*〉

な「生産様式」という表現に変えなければならなくなったのか。

〈bürgerlich〉という限定詞をかぶせた「市民的生産様式」という用語表現と、生産様式の近代的形態としての資本主義範疇の実体的な内容とのあいだの違和性が、結局のところ、マルクスにおける用語表現そのものについての転換をひきおこすことになった、と判断される場所である。

ところが、そのように違和感を感じて使用にたえない用語として“廃語”とされてしまうことになる必然的理由は、〈bürgerliche Produktionsweise〉を「ブルジョア的生産様式」というかたちで、その実体的内容にふさわしい表現用語に訳したのでは理解困難になってしまう。

すなわち、「ブルジョア的生産様式」という訳語にした場合には、そのような用語を廃止して、ほぼ同じニュアンスの「資本家的生産様式」という用語にどうして全面的に転換しなければならないのか、その理由が明らかでなくなってしまうのである。

それにたいして、ヘーゲル的な「市民社会」の規定詞を継承したかたちの「市民的生産様式」という訳語であるならば、近代社会の経済諸関係についての研究がすすみ、資本＝賃労働関係的な階級的な生産の内容がより明確になってくるなかで、〈bürgerlich〉な「生産様式」という用語表現の不適切性が次第に感じられるようになり、それがあある一定の時点において、それまで10年以上にわたって使いつづけてきた〈bürgerlich〉な「生産様式」という用語表現を全面的に廃棄して、〈kapitalistisch〉な「生産様式」という表現用語に転換するようになるということが、明確に理解しうることになる。

これが、〈bürgerliche Produktionsweise〉に「市民的生産様式」という訳語をあえてあたえた2つめの理由である。

このように、用語そのものの作成の時点において、「Bourgeois-ブルジョア的」という接頭語を使わないで、ヘーゲルの「市民社会」概念の用語表現における限定詞「bürgerlich 市民的」を継承したということ、そして、やがて後の一定の時点において「〈bürgerlich〉な生産様式」という用語は“廃語”

とされて「資本家的生産様式」という用語へと全面的に転換されることになる、ということからみて、1847年より1859年までマルクスが10年以上ものあいだ資本主義範疇をしめすものとして使っていた〈bürgerliche Produktionsweise〉という用語は、マルクスにおける資本主義範疇の用語法についての検討にあたっては、「ブルジョア的生産様式」という訳語よりも「市民的生産様式」という訳語の方がより適切である、と思われるのである。

もちろん、マルクスの資本主義範疇の用語法についての検討という課題とはかかわりのない一般的な内容理解の場合には、「ブルジョア的生産様式」という訳語の方がより内容に適切な訳語であることは確かであって、そのような使用に異をとらえようとしているわけではない。

4. なぜ「市民的生産様式」から 「資本家的生産様式」に転換したのか？

マルクスは、近代社会の経済諸関係にとって基軸的内容をしめす資本主義範疇として「市民的生産様式」という用語を1847年より1859年にいたるまで使いつづけてきたのに、研究の途中でそれを止めて、「資本家的生産様式」という用語に全面的に転換することにしたのは、何故なのか。このことが、ここでの問題点である。

結論的にいえば、先にみてきたように、「市民的生産様式」という用語は、近代社会の経済諸関係についてのマルクスの研究が深化するなかで、生産様式についての近代社会特有の形態の特徴を表現するにはふさわしくないと感じるようになり、その実体的内容の特徴によりふさわしい表現用語を求めて模索し、それにもっとも適切な用語として「資本家的生産様式」という用語を確定するにいたった、ということである。

そのような用語転換への模索にあたっての苦闘の痕は、『1857-58年の経済学草稿』としての『経済学批判要綱』に、きわめて明瞭なかたちでしめさ

れている。

そこで、まず、そのような『要綱』への取組みの経過と、『要綱』の内容の特徴からみていくことにしよう。

1848年の革命の敗北後ロンドンに亡命したマルクスは、1850年代の前半に、24冊もの膨大な『ロンドン抜粋ノート』を作成しているが、そのなかで、経済学研究とりわけ貨幣・信用論の文献に精力的に取り組み、そのうえで、1857-58年の『経済学批判要綱』の体系的展開をおこなう。

『経済学批判要綱』は、「貨幣にかんする章」と「資本にかんする章」との2章構成をとっている。

そのように、商品・貨幣関係を取り扱う「貨幣にかんする章」と、資本＝賃労働関係を取り扱う「資本にかんする章」との、規定的内容の区別の明確化による論述は、それまでには明らかでなかった近代社会における経済的諸関係における重層的内容を明確にするようになってくる。

第1に、「諸交換価値、貨幣、諸価格」についての考察をおこなう「貨幣にかんする章」においては、ロンドンでの1850年代前半における貨幣論研究の成果として、商品・貨幣関係そのものが自立化したかたちで考察され、その独自の規定的内容が解明されることになる。

第2に、「資本にかんする章」においては、商品・貨幣関係とは規定的内容を異にする生産活動における資本＝賃労働関係のもとでの資本の運動が取り扱われ、そのなかで価値増殖の秘密が明らかにされ、そのうえに資本の運動の諸姿態が解明されることになる。

どうやら、ここにおいて、マルクスは、それまでは「市民的生産」「市民的生産様式」という用語でもって表現していた近代社会における特有の「生産」や「生産様式」の特徴的形態について、生産過程における資本＝賃労働関係のもとでの生産活動のあり方にふさわしいより適切な用語でもって表現する必要性を感じはじめたようである。

マルクスは、『経済学批判要綱』において、生産活動における近代社会特

有の形態規定性をもつ資本＝賃労働関係のもとでの価値増殖をめざす生産形態の内容把握の深化にもとづきながら、生産や生産様式をより適切に表現するための用語として、それまで使っていた「市民的生産」「市民的生産様式」という用語に代わるあらたな表現を生みだそうと、さまざまな用語表現上の試みと模索をおこなっている。

ところで、そのような『要綱』における「市民的生産様式」に代わる用語上の試みも、「貨幣にかんする章」においては、「交換価値のうえに打ちたてられた生産様式 die auf den Tauschwerth gegründete Produktionsweise」とか「交換価値に照応する社会の生産様式」といったかたちでの「交換価値」とかかわらせた用語表現しかみられない。

それにたいして、「資本にかんする章」に入ると、「資本にもとづく生産様式 eine auf das Capital gegründete Produktionsweise」といった表現が出現するようになり、それ以外にも「資本によって支配されている生産様式」「資本が前提となっている生産様式」「資本そのものに適合的な生産様式」といった用語が続出するようになり、もはや「市民的生産様式」という表現はほとんど使われなないといった状況になっている。

このことはなにを意味するか。

『要綱』の「資本にかんする章」において出現するこのような「資本を基礎とする……」「資本が支配する……」「資本のうえに打ちたてられた……」生産や生産様式というあらたな表現用語の多様な試みは、それ以前に使っていた「市民的生産」や「市民的生産様式」という表現用語に取って代えられるべきところの、そして、のちの『資本論』段階における「資本家的生産」や「資本家的生産様式」へと結晶化して繋がることになる資本主義範疇についての用語上の転換の試みに他ならない。

そして、マルクスが「資本家的生産」「資本家的生産様式」という用語表現を確定したのは、『経済学批判』第1分冊の「序言」が書かれた1859年1月より後、そして、『1861-63年の経済学草稿』（『資本論草稿』）の執筆を開始

した1861年の夏頃までの時期である。

そこでは、『経済学批判要綱』の「資本にかんする章」にもとつきながら、「資本」についての理論的解明をおこなうための『経済学批判』第2分冊(後に『資本論』へと再構成される)の執筆のための資料整理と、執筆プランの作成のなかで、「資本家的生産」「資本家的生産様式」という資本主義範疇を表現する用語が確定的に打ちたてられているのである。

そして、その後の『資本論草稿』としての『1861-63年の経済学草稿』のなかでは、「資本家的生産」「資本家的生産様式」という表現は、すでに明確に確定済みの用語として、くりかえし使用されている。

V. 資本主義発見のプライオリティ

マルクスの近代社会認識にとってのキー・ワードをなす基軸的範疇は、ドイツ語形での用語に限定してみるならば、「bürgerliche Gesellschaft 市民社会」—「bürgerliche Produktionsweise 市民的生産様式」—「kapitalistische Produktionsweise 資本家的生産様式」と転回=発展をとげている。

だが、それを資本主義範疇としての規定的内容についてみると、「市民社会」から「市民的生産様式」への唯物史観を媒介とした転回において、マルクスは、初めて、「資本主義の発見」をおこなったといえるのである。すなわち、マルクスの資本主義範疇は、フランス語形での「ブルジョア的生産諸関係」とそれにつづくドイツ語形での「市民的生産様式」というかたちで、初めて確定されたのである。

それにたいして、「市民的生産様式」から「資本家的生産様式」へのキー・ワードの転換は、概念内容としては同じ資本主義的経済関係をとらえながらも、対象的事物の内容の具体的解明がすすむなかで、対象的事物の規定的内容にとって、よりふさわしい表現用語があたえられることになった、という

ことをしめすものである。

そして、ここにおいて、のちに「資本主義」という用語と結びつけられることになる「資本家的生産様式」という表現が用語法的に見いだされた、ということができる。

だからして、いわゆる中期マルクスにおいてキー・カテゴリーとなっている「市民的生産様式」という用語は、内容的には後期の『資本論』段階における「資本家的生産様式」と同じものをあらわしながら、表現用語としては、初期マルクスにおいてキー・カテゴリーであった「市民社会」で使われていた限定詞「市民的 *bürgerlich*」をそのまま「生産様式」に付加するかたちでつくられているものであって、表現する事物としての資本主義範疇の内容を的確に表現するには不十分な、違和感をもった用語表現であった。

そのため、「市民的生産様式」という用語は、資本主義範疇の表現用語としては過渡的性格をもたざるをえず、「資本家的生産様式」という用語表現を確定した後期マルクスにあっては“廃語”として消滅の道をたどることになったのである。

このようなマルクスにおける「資本主義の発見」のプロセスと用語法上の変遷は、マルクスにおける資本主義認識の方法にかんするさまざまな問題にたいして照射をあたえ、それらの解明への道をひらくものである。

ところで、これまでみてきた近代社会における特有の歴史的諸形態をしめすという性格と意義をもつ「資本家的生産様式」なるマルクスの資本主義範疇は、現在われわれが近代社会の経済システムや社会体制を表現するものとして一般に使っている「資本主義」という用語と、社会構造的な内容をしめす用語として本質的な同一性をもったものである。

現在一般に日常語として使われている「資本主義」という用語は、ビエール・ルルーヤルイ・ブランやサッカーなどの諸文献において散見される「資本主義」という言葉と同じ言葉でありながら、その規定的内容も、認識方法も、それとは大きく異なるものである。

そのようなピエール・ルルーなどの「資本主義」語の継承としてではなくて、マルクスの「資本家的生産様式」という用語が、その後、マルクス以後の論者によって、「資本主義 Kapitalismus」という言葉に置き換えられながら、さまざまな多様化と変容をともないつつも、基本的には経済システムや社会体制としての規定的性格をもつ現在の「資本主義」という用語法へと繋がられていくことになるのである。

この点についての経緯は、今後シェフレやゾンバルトなどの著書の検討のなかで明らかになるところであろう。

ともあれ、ここで、小括的な締めくくりとして、「資本主義」を最初に見つけたのは誰かということについてみていくことにしたい。

マルクスが資本主義範疇を確定したのは、1846年の「アンネンコフ宛ての手紙」においてであり、公刊された著書・論文としては1847年の『哲学の貧困』においてである。

それにたいして、ピエール・ルルーが初めて「資本主義」という言葉を使ったのは1848年の『マルサスと経済学者たち』の初版においてである。また、ルイ・ブランの場合は1850年に出版した『労働組織』第9版において、サッカレーの場合は1854年の『ニューカム家の人びと』第2巻において「資本主義」という言葉が使われているのである。

それらのことは【図1】にしめしているところであるが、そこから明らかになることとして、1846年の「アンネンコフ宛ての手紙」と1847年の『哲学の貧困』においてマルクスが資本主義範疇を確定しそのことを明示したということは、ピエール・ルルーが「資本主義」という言葉を初めて使った1848年や、ルイ・ブランの1850年や、サッカレーの1854年よりも早い年次であることが確かだということである。

したがって、そのかぎりにおいては、「資本主義」を最初に見つけたのはマルクスである、ということができる。

「資本主義」発見のプライオリティ (priority), すなわち、最初の発見者とし

【図1】 マルクスの〈資本主義〉認識

マルクスの足どり	他の論者による 「資本主義」語の使用
1843年 「ヘーゲル法哲学批判・序説」等初期3論文 ヘーゲルの「市民社会 bürgerliche Gesellschaft」論 ↓	
1844年 『経済学・哲学草稿』 スミス『国富論』にもとづく「資本」「賃 労働」「土地所有」の3欄並記 疎外された労働 ~~~~~	
1845-46年 『ドイツ・イデオロギー』 唯物史観の確立 ↳ 生産の規定的性格 ↓ 「生産様式 Produktionsweise」「生産関係」概念 ~~~~~	
……「資本主義」範疇の確定…… ↓↓ ↓ 「ブルジョア的生産諸関係 les rapports de la production bourgeoise」	
1846年 「アンネンコフ宛ての手紙」	
1847年 『哲学の貧困』 ~~~~~	
↓ 「市民的生産様式 bürgerliche Produktionsweise」	
1847年 「道徳的批判と批判的道徳」 ↓	
1848-49年 『賃労働と資本』『共産党宣言』 ↓	1848 ルルー 『マルサスと経済学者たち』
(1857-58年 『経済学批判要綱』)	1850 ルイ・ブラン 『労働組織』第9版
1859年 『経済学批判』 ↓	1854 サッカレー 『ニューカム家の
~~~~~	人びと』
↓ 「資本家的生産様式 kapitalistische Produktionsweise」	
1859-61年 「資本にかんする章へのプラン草案」	
1861-63, 63-65年 『資本論草稿』 ↓	
1867年 『資本論』第1巻刊行	1869 ブランキ 『社会批判』
	1870 シェフレ 『資本主義と社会主義』
	1902 ゾンバルト 『近代資本主義』

ての優先権は、マルクスのものであるということが出来る。

すなわち、ピエール・ルルーやルイ・ブランやサッカーたちが「資本主義」という言葉を使い始めるよりも先に、すなわち、この世にまだ「資本主義」という言葉が存在しておらず、マルクス自身も「資本主義」という言葉を知らない状況のもとで、マルクスは、人類の文化と科学の歴史のなかで初めて、近代社会の経済構造の歴史的形態としての資本主義範疇を見だし、それを世に示したのである。

そして、そのようにマルクスが見いだした資本主義範疇が、現在全世界において使われている「資本主義」という用語へと繋がっていくことになるのである。

だが、マルクスは、その発見した資本主義範疇を「資本主義」という用語においてではなくて、フランス語形での「ブルジョア的生産諸関係」という用語やあるいはドイツ語形での「市民的生産様式」という用語でもって、しめたのである。したがって、そのかぎりにおいては、用語としての「資本主義」という言葉そのものの最初の発見者は、マルクスではない。

〔注〕

- 1) *The Oxford English Dictionary*, 2nd ed., 1989, Vol. VIII, pp.112-113.
- 2) Karl Marx, *Zur Kritik der Politischen Ökonomie (Manuscript 1861-1863)*, 新 MEGA, II-3, S.246. 資本論草稿集翻訳委員会訳『マルクス 資本論草稿集』④, 大月書店, 433 ページ。
- 3) マルクス『経済学批判』『マルクス=エンゲルス全集』第13巻, 7 ページ。MEW-13, S.9.
- 4) マルクス『賃労働と資本』『マルエン全集』第6巻, 403 ページ。MEW-6, S.408.
- 5) マルクス『哲学の貧困』旧 MEGA, I-6, S.217.『マルエン全集』第4巻, 178 ページ。MEW-4, S.170.
- 6) マルクス『経済学批判』『マルエン全集』第13巻, 6-7 ページ。MEW-13, S.9.
- 7) 馬場宏二『新資本主義論』(名古屋大学出版会, 1997年)7 ページ。
- 8) 伊藤誠「資本主義」『マルクス・カテゴリー事典』(青木書店, 1998年)222-223 ページ。
- 9) 広松渉編訳『新編集版 カール・マルクス/フリードリヒ・エンゲルス ドイツ・

イデオロギー 第1巻第1篇』（河出書房新社，1974年）26ページ。

- 10) 「マルクスからアンネンコフ（在パリ）への手紙」（1846年12月28日）『マルエン全集』第4巻，564ページ。MEW-4, S.549. 新MEGA, III-2, S.72.
- 11) 同上，567ページ。MEW-4, S.552. 新MEGA, III-2, S.74-75.
- 12) エンゲルス「カール・マルクス『経済学批判』」『ダス・フォルク』14号（1859年8月6日）『マルエン全集』第13巻，472ページ。MEW-13, S.469.
- 13) マルクス『経済学批判』『マルエン全集』第13巻，8ページ。MEW-13, S.10.
- 14) マルクス『道徳的批判と批判的道徳』『マルエン全集』第4巻，356ページ。MEW-4, S.338-339.